

第13分科会

学生の縦のつながりを活かした学生支援

報告者

- 高橋 伸一**（佛教大学 社会学部 公共政策学科 教授）
野中 萌美（佛教大学 社会学部 公共政策学科 2 回生 縁支援上回生）
池田佳奈子（お茶の水女子大学 情報基盤センター アカデミック・アシスタント）
森川 園子（国際基督教大学 教務部 アカデミックプランニング・センター）
水庭 隆史（国際基督教大学 教養学部 3 年生 学生ピア・アドバイザー）
西村 康平（国際基督教大学 教養学部 2012 年卒業 元学生ピア・アドバイザー）
小貫有紀子（九州大学 教育改革企画支援室 特任助教）

コーディネーター

- 林 悠子**（佛教大学 社会福祉学部 講師）

学生の多様化が著しい現在、文部科学省においても学生中心の大学づくりへの転換が指摘されるなど、学生支援の充実は全ての大学における課題である。各大学では、全ての学生の学びを充実したものとするために、大学入学時から卒業まで様々な形での学生支援が行われている。誰が、誰（どのような学生）に対して、どのような支援をおこなえるか、を考える場合、多様な可能性があるだろう。その中で、学生自らが支援の担い手となることによって、学生の自立性・主体性を育てようとする取り組みも多く見られる。本分科会ではこの点に着目し、学年を越えた縦のつながりを学生支援にどのように活かせるのか、を中心に正課・正課外それぞれにおける具体的な取り組み事例の報告をもとに考える機会としたい。

＜第13分科会＞

学生の縦のつながりを活かした学生支援

参加人数 32名

報告者

- 第1報告者 高橋 伸一 (佛教大学 社会学部 公共政策学科 教授)
野中 萌美 (佛教大学 社会学部 公共政策学科 2回生 縁支援上回生)
- 第2報告者 池田佳奈子 (お茶の水女子大学 情報基盤センター アカデミック・アシスタント)
- 第3報告者 森川 園子 (国際基督教大学 教務部 アカデミックプランニング・センター)
水庭 隆史 (国際基督教大学 教養学部 3年生)
西村 康平 (国際基督教大学 教養学部 2012年卒業生)
- 第4報告者 小貫有紀子 (九州大学 教育改革企画支援室 特任助教)
- コーディネーター 林 悠子 (佛教大学 社会福祉学部 講師)

分科会のねらい

学生の多様化が著しい現在、文部科学省においても学生中心の大学づくりへの転換が指摘されるなど、学生支援の充実は全ての大学における課題である。各大学では、全ての学生の学びを充実したものとするために、大学入学時から卒業まで様々な形で学生支援が行われている。誰が、誰(どのような学生)に対して、どのような支援をおこなえるか、を考える場合、多様な可能性があるだろう。その中で、学生自らが支援の担い手となることによって、学生の自立性・主体性を育てようとする取り組みも多く見られる。本分科会ではこの点に着目し、特に、学年を超えた縦のつながりが支援にどのように活かせるのか、正課・正課外それぞれにおける具体的な取り組み事例の報告をもとに考えることをねらいとした。

報告の概要

午前の部では、学生の縦のつながりを活かした学生支援の具体的実践事例の報告、午後の部では、午前の事例報告を踏まえた包括的な報告として、学生による学生支援活動の全国的状況から見る学びの要素についての報告のあと、質疑応答・意見交換を行った。以下は、各報告(詳細は発表資料参照)および質疑応答・意見交換の概要である。

午前の部

【第1報告】「支援上回生」が支える導入教育(入門ゼミ)」

佛教大学社会学部公共政策学科教授 高橋伸一氏
社会学部公共政策学科 縁支援上回生 野中萌美氏

報告の前半では、高橋氏から、全学的な学生支援プログラム「縁(えにし)」コミュニティ事業から、社会学部での支援上回生の活動の定着に至るまでの経過・事業を通して明らかになった効果と課題、についての報告があった。支援ツールとしてSNSを導入したが、SNS利用の機能的限界点や、学部による利用に対する温度差、という課題が浮上した。これらを克服するために、ツールを介してではない「face to face」のつながりとして「支援上回生」による支援が実施されることとなった。社会学部では「支援上回生」が1回生「入門ゼミ」に参加している。支援上回生が、新入生と教職員のつながりの潤滑油として力を発揮するようになり、現在では、社会学部の支援上回生が組織化され、学生が主体となって運営するまでに定着しているということである。

後半では、「支援上回生」の学生である野中氏から、具体的活動内容、入門ゼミに支援上回生が参加することの効果、支援上回生となったことでの自分自身の成長、について報告があった。

1回生にとっては、大学でのゼミ形式の授業における緊張・戸惑いが軽減すること、モデルとなる上回生に刺激を受け、「主体性」の意味を肌で感じる、自分もあのようにになりたい、という、学びへの動機づけとなる。支援上回生にとっては、ゼミ内での、ディスカッションの進行など具体的な役割を、支援上回生が教員と相談しながら自ら作り出す、という経験を重ねることで、大学での学びの目的を自覚し、授業に対する意見を持つようになったこと、コミュニケーション能力の向上、などが成長した点として挙げられた。

【第2報告】

「授業「内」と授業「外」の中間の視点から
～お茶の水女子大学附属図書館内ラーニング・コ
モンズを例として～」

お茶の水女子大学情報基盤センターアカデミック・
アシスタント 池田佳奈子氏

授業内と授業外をつなぐ場、としての図書館で
の支援について、ラーニング・コモンズでの実践
事例の報告をいただいた。

お茶の水女子大学では、2007年より図書館内
の学習空間としてラーニング・コモンズが設置され
ており、ラーニング・コモンズの物的・人的環境に
ついての紹介があった。人的支援として、大学院
生がラーニング・アドバイザーとして活動しており、
パソコン操作、データベース等での情報収集方法、
授業課題などの質問に対応している。

支援の利用者である学部生にとっては、ラーニ
ング・アドバイザーの体験談を聞いたり共感的対
応をしてもらうことにより、安心して学習に取り組
めるというメリットがある。一方、ラーニング・アド
バイザーにとっては、質問に対応するために調べ
ることで自分自身の知識が増えた、自分の学びに
も役立つ、役に立っている実感を得られた、ラー
ニング・コモンズで学習する学部生の姿から刺激
を受ける、他学部・他学年の動向への関心が増え
る、等、アドバイジングにより、アドバイザー自身
の学習意欲への影響や、視野の拡大、充実感など
が育っている。課題としては、ラーニング・アド
バイザーの人柄に依存するところが大きい点、シス
テム化が不十分な点、授業課題への対応のしかた
などが挙げられた。

【第3報告】

「授業外での支援：ピア・アドバイザーによるア
カデミック・アドバイジング」

国際基督教大学教務部アカデミックプランニン
グ・センター 森川園子氏

教養学部3年生 学生ピア・アドバイザー

水庭隆史氏

卒業生(IBS第1期生)西村康平氏(ボランティア参加)

前半では、森川氏より支援のしくみの全体像の
報告がなされた。大学内各部署で、ボトムアップ
でピアサポートの取り組みが行われてきているこ
と、アカデミックプランニング・センター (APC)
およびピア・アドバイザー (IBS: ICU Brothers
& Sisters) の大学内での位置づけ、活動内容等、
アカデミック・アドバイジングの大学教育におけ
る位置づけについても言及された。2～4年生ま
での IBS がいることによる学生間のつながりや、
卒業までの継続を前提とした活動であることによ
る学生の成長、APC と IBS との密接な連携により、
APC の方針枠組みの中で IBS の主体性を重視・
尊重していること、全学的な認知を得ていること、
組織横断・縦断的活動である、という特徴が挙げ
られた。

後半では、現在のピア・アドバイザーである
水庭氏より、アドバイジングにおける他の学生と
の関係では、フラットな視点、知識・経験の共有、
話しやすさを意識していること、活動を通して、教
職員、在校生、卒業生をつなぐ架け橋としての役
割、IBS の先輩から後輩の関係で育つこと、につ
いて報告をいただいた。さらに、IBS 創設メンバー
(第1期生)である、卒業生の西村氏にもボランティ
ア参加していただいた。活動の立ち上げから定着
まで、「ひたすら考え、話した」という経験により
成長したこと、IBS の活動経験により、「対話の中
から情報を集め整理する習慣」、「自発的な課題解
決への挑戦」という力が、社会人になってから生
きているとのことであった。

午後の部

【第4報告】

「学生による学生支援活動の全国状況から見る学
びの要素」

九州大学教育改革企画支援室特任助教

小貫有紀子氏

様々な呼び方をされる「学生による学生支援」を、
北米では、総称して「Peer Education」とされて
いること、ピア・エデュケーション発展の背景につ
いて解説があった。日本の高等教育においても、

ピア・エデュケーションへの関心の高まり、取組の拡大が見られている背景について述べられた後、ピア・エデュケーションのより良い展開のための示唆として、大学の教育目標に沿った学生の成長をどこに求め、ピア・エデュケーションの果たす役割の核となる学習環境構築をどのように実施し、活動による学生の成長をどう可視化するのか、等を、「GRIP」(Goal: 目標、Role: 役割、Impact: インパクト、Process: プロセス) という枠組みに基づき、提示された。

【質疑応答・意見交換】

まず初めに、午前中の事例報告および午後の包括的報告を聞いた感想・意見などを、フロア2-3人で共有し、さらに、メンバーを変えて、全体で深めたい内容について話していただいた。報告者の方にもフロアを回っていただき、交流していただいた。そのあと、質疑応答・意見交換に移った。以下がその概要である。(●のあとの()内は質問者の立場)

●(職員) 取組みの中で、真面目な学生が背負いすぎたり、離れて行ってしまう学生がいる。支援する学生間の関係性構築、教職員のサポートはどのように行っているのか。

(野中) プロジェクトの時だけでなく、普段から自分の性格を客観視しながら人間関係を作ろうとしている。

(西村) 学生間の関係性の中で問題を抱え込んでいる学生の存在に相互に気づくことで、自分の役割を再認識することにつながる。

(森川) 基本的には学生に任せているので去っていく学生もある中で、定着している学生に対しては、教員は干渉しすぎず見守っている中で、学生同士での支え合いが生まれている。(活動を) やらない学生のことを気にかけられているが、職員が入り込みすぎず、まず、学生どうしでの解決を促す。学生が問題を自分たちのことと捉え「腹を割って」関わりあえるかを観察し、どうしても、という時に職員が介入する。

●(教員) 教員・職員・学生の協働のための、具体的にどんなところから始められるか？

(森川) 教員の巻き込み・・・日常的に「味方」を少しずつ作る。学期に1〜2回の「お茶会」「ランチ会」などを開催、気軽に話せる場を作っている。小さなレベルでの巻き込みの機会を作る。必要性のあるところから、とにかく動き出してみる。

(小貫) どうやって仲間を作るか、がとても大事。時間をかけた日常的な仲間づくりの一方で、上部層への働きかけも必要。

●(教員) ボランティアの公募で学生が応募してくるだろうか・・・スタッフ募集の方策は？

(高橋) 今の学生はボランティア活動に対する関心が高い。最初の流れを組み立てれば学生は動き出す。

(森川) (IBS は) 当初はボランティアだったが、途中から有償になった。最初は公募にせず、他の部署等からの学生情報をもとに依頼した。職員から依頼されることで、学生の使命感が高まった。だが、学生の多忙な生活の中でボランティアへの時間のさきにくさ、責任感の維持、大学への貢献度、等を考慮して有償へ。当時の学生は有償化に反対した。(西村) 活動途中で有償になったが、お金を自分のために使うのではなく、IBSのために還元しようと考えた。アルバイト代、ではなく、学生の大学への奉仕に対する感謝としての有償であり、あくまで精神はボランティアである。

(水庭) お金をもらえないよりはもらえるほうが良いが、IBSの活動はお金をもらうためにやっているのではなく、学生の相談が第一の目的であることが再認識できた。

(池田) ラーニング・アドバイザーは有償。ラーニングコモンズの前身であるパソコン相談室に来室した学生に声をかける、というところから始まった。現在は、人当りのよい親切な学生を募集したいので、ラーニングアドバイザーの後輩を紹介してもらう、という形である。

●(教員) 学生はなぜ支援活動に「参加しよう」と思ったのか？

(野中) 部活・サークルには特にやってみたいものがないと思っていた中、縁の活動を知った。参加することで、自分の力で企画したり動かしたりできる余地があるのでは・・・と思い、やってみたい、という意欲が生まれた。入ってみると、ここが私の居場所だ、という感覚を持てた。ボランティアかアルバイトか、といったことはどちらでもよく、自分の力を試すことができる楽しい場所としての団体に入りたかった。

(水庭) 1 回生の時は IBS に相談をした経験もなく、公募はあったが見た記憶はなく、一期生西村さんから声をかけてもらったことで入った。アルバイト・部活等していなかった。先輩・メンバーからの刺激・影響があり、現在は IBS 中心に関わっている。

(西村) 職員からの依頼があった。断ることもできたわけだが、自分自身が 1 回生の時に履修について戸惑ったが相談できなかった経験があり、学生として大学に還元したいと思った。

(池田) 元ラーニングアドバイザーであったが、TA などと同様に有償であるという条件のもと、大学での空き時間に仕事ができる、ということで始めた。現在のラーニングアドバイザーも同様であると思う。

●(学生) 事例報告から、学内には多様な「つながり」があるのが良いと思った。支援者と被支援者の関わりのレベルには、浅いものから深いものまで混在しているのがよいと思えた。

現在の実践が、他のピア・サポート団体からどのように捉えられているのか？また、大学全体で多様な「つながり」の形を作るにはどうしたらよいのか？

(高橋) 支援上回生に対する教員の関心は様々だが、その中で学生が試行錯誤することにより、自分たちの目標を明確にすることが可能。全学的に組織化されていないため、持続性に課題がある。

(森川) IBS の認知度をどう高めるかが課題の一つであり、学生のいる所へ出向いてゆく等試行錯誤中である。最大のインパクトは、IBS 学生自身が広告塔となれることであり、それによって IBS の活動を学生に浸透させてゆける。

(池田) ラーニング・アドバイザーに対する学生の

認知度は高い。先輩に相談できる、ということ以身近に感じられる。制度化も比較的できている。課題は、ラーニング・アドバイザー間の連携、授業との連動のあり方を考えることである。

(小貫) つながりをどのようにコーディネートするか、という問いは非常に重要である。役割・ミッションの異なる支援の仕組みを、大きくひとまとめにするのではなく、小さな仕組みを数多く作り、網の目のように支援を張り巡らせてゆくほうが現実に近い。ピア・エデュケーションは万能薬ではなく、それだけで網の目ができるのではない。全ての教職員が、学生の成長に関わっていることを自覚化することが重要である。

●(職員) 教職員の、支援に対する熱意を高めるための方策は？

学生の成長・大学の変化を可視化するために教職員ができる方法は？

ピア・サポートに関わる学生を育てるための教育・研修のありかたは？

(高橋) 学生がどんどん学外へ出てゆくように促す。提案として学生に提示することで学生がチャレンジしようとする。教職員は指示をするのではなく、見守る姿勢を貫くことで、決して全員が「優秀」な学生でなくても、活動に取り組むプロセスの中で学生個人が自分の役割・目標を自覚してゆく。到達したことに対して教職員は感謝をもって受け止める。学生が経験したことは必ず自分の財産になる。大学全体から見るとわずかであるかもしれないが、成長する学生は着実に増えている。支援上回生という縦のつながりを通した活動によって、「学生の主体的な学び」を、獲得してゆければよいと思う。

(野中) 私の場合は「縁」と出会ったが、「縁」の活動だけでなく、ほかのサークル等であっても、縦のつながりを経験する中で、同じように成長すると思う。

(小貫) 調査研究の中で明らかになってきたことがある。学生が支援活動を通して成長したと考える点は、教職員が考える学生の成長(被支援学生から感謝されること等)と異なっていることである。

スタッフの学生は、自分よりもスキル・知識が足りないスタッフとの関わりの中で、支援の目的・自分たちの役割を再認識し、支援に対する自分の考えを自覚する。この時に成長を見出している。したがって、学生が自分たちの支援を振り返ることができる機会を作ることが大切である。

学生は、支援活動を通して、大学の組織・制度について知るようになる。そうすると学生の生活の中に、大学の教育目標や学習者像を踏まえたうえで修学するように変化する。すなわち、教職員から学生への、大学の学習者像を踏まえた問題解決への日常的助言が、学生の中で自立した学習者観を深めるうえで効果を発揮している。

学生を主体的にさせるには、教職員自身がアクティブになることが必要である、ということが研究を通してわかってきた。教職員の、支援に対する熱意を高めるためには、おりてきた目標を共有するのではなく、共感できる目標を仲間で作ることが近道である。教職員自身が学生にどうやって関わってゆくのか、どうやって大学に・高等教育に貢献するのか、教職員同士フラットな場で話し合いをすることが必要で、そのための場を作るのがピア・エデュケーションに関わる者の使命である。(森川) 現場の立場から言うと、最低限の学内での手続きは踏んだ上で、小さなところからとにかく動き始め、そのプロセスの中で問題点が出てきたら対処を考える。可視化のデータについては、現在 APC のオフィスで、相談に訪れた学生のデータをとっている。また、年度末に学生が書く「エッセイ」にメジャー選択に関するアンケートを盛り込み、その結果、選択の決め手・履修計画の助けとして IBS のサポートと答えた学生が一定数いることを、教授会等で報告するなどして、活動のアピールを行っている。さらに、IBS 自身による調査も実施している。学生のトレーニングについては、まず、遊びながら・楽しみながら、という要素を絶対に忘れないように、また職員からあれこれ指示をしないようにしている。学生に役割を与え自発性を引き出すきっかけ・しぐみを職員が作ってゆく。

【総括】

本分科会は、(報告者・参加者ともに) 学生・教員・職員、研究者、と多様な立場の方々が集う場となった。今回、上級生・下級生という「縦のつながり」を、学生による学生支援について考える一つの入り口として取り上げが、分科会を通して、「縦をつなぐ」ための多様なつながりのあり方、誰がどのように関わることができるのか、について、多くの示唆を得ることができる機会となった。

最後に、「学生による学生支援」の主体である、報告をしていただいた学生の皆さんから分科会参加を振り返っての感想をいただいたので、ここで紹介させていただきたい。報告者・参加者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

●学びの主体性と自主活動—FDフォーラムに参加して—

佛教大学社会学部公共政策学科2回生 緑 支援上回生 野中萌美

私は佛教大学社会学部の学生団体「緑」で活動しています。毎週一回生の授業(入門ゼミ)に「支援上回生」という役割で入ります。これは授業を活用し、早く新入生が大学で居場所をつくれるようサポートすることが目的です。

支援上回生は新入生にとって「主体的な学びを肌で感じさせる存在」だと考えます。「大学には支援上回生のようなスタイルもある。自分もこのような存在になりたい」と思う新入生が増えれば学生の成長に繋がるのではないかと考えて活動しています。

「支援上回生」は完全にボランティアです。また、学生主体で運営されますので、「ゆるさ」も長所の一つです。しかしそれゆえ、課題も多くあります。例えば「支援上回生自身が目的を失ってしまう」「先生は支援上回生にどこまで要求すべきか悩む」といったことなどが大きくなると活動が停滞することもあります。

私は今回のフォーラムに出席し他の団体の話を聞いて、どんな活動にもそれなりに課題はあると

いうことを確認しました。そのうえで、「何の為に何の活動をするのか」という目的の明確化と相互の共通理解が重要であることを知りました。うまく言えませんが、課題の解決には一步一步という着実性、そして何よりも学生自身が解決していくことが重要であると感じました。そのような団体が増えることによって大きな規模で「学生の主体的な学び」は形成されると思います。

● FD フォーラム京都に参加しての感想

国際基督教大学 教養学部 3年生 水庭 隆史

今回、本フォーラムに参加して感じたことは、「仲間がいる」ということです。普段活動をしている時や、今回の発表の原稿を考えている時に、IBS に対するやりがいや課題を改めて感じることができました。そういう振り返りができただけでも、本フォーラムは私にとってよい機会になりましたが、それ以上に、他の大学の方々の発表を聞いたり、参加者の声を聞いたりすることができたのが大変よかったと思います。発表者の方々は、各大学で行っていることは多少異なりますが、その中で同じような想いや課題を感じていることを感じました。また、参加者の方々は、「自分の大学をよりよくしたい、でもどこから始めればよいかわからない」といったもどかしさを感じながら私たちの話を熱心に聞いてくださいました。同じ想いを持って、あの場に集まった人たちはみんな仲間だと感じられ、本フォーラムの中でお互いに与え、得られることがあったのではないかと感じました。

● FD フォーラム分科会「縦のつながりを活かした学生支援」に参加して

国際基督教大学 教養学部 2012 年卒業生 西村 康平

今回私は、教職員でも学生でもなく、卒業生という立場で参加した。大学を離れて初めて気付くこともあったし、日々の仕事にも活かせるような発見もあった。

私たちが IBS を立ち上げたとき、そこにはピア・アドヴァイザーという仮称しかなかった。自分たちで組織の名前をつけることになり、いくつか案が出た中で、

1 年次の英語のクラスをサポートする「支援上回生」としてかつて存在していたという ICU Big Brothers and Sisters から名前を引き継ぐことになった。当時はそこまで意識していなかったが、この名前になったからこそ、IBS は ICU の歴史を常に顧みなければならないし、縦のつながりの流れの中で生き続けると信じている。

現場ではピアエデュケーションをやりたいと思っても事務局が許可しなかったり、はたまた事務局が企画したものの現場の協力を得られなかったりと、現場と事務局とが衝突するという話をいくつかお聞きした。いずれにせよ現場のモチベーションは当事者の学生たちにも大きく影響を与える。その意味で、現場のニーズをもとに活動している組織はうまく継続できているのではないだろうか。10 年 20 年続いてメンバーが創設時のことを知らないとしても、継続して活動できているというのは、現場のニーズを常に満たし続けているからだと思う。

この FD フォーラムに参加している間、ほかの IBS のメンバーは普段どんなことを考え、どんな行動をしていただろう、ということを思い返していた。このような貴重な仲間とともに IBS で活動できたこと、卒業生ながら FD フォーラムに参加できたことに深く感謝している。

「支援上回生」が支える導入教育（入門ゼミ）

佛教大学 社会学部 公共政策学科 教授

高橋 伸一

佛教大学 社会学部 公共政策学科 2 回生

野中 萌美

SNS を利用した「縁」コミュニティ

（文部科学省 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム採択事業）

佛教大学の大学改革プロジェクト（2007 年発足）として、「縁」コミュニティによる離脱者ゼロ計画が出発した。このプロジェクトは、入学者全員の卒業を目指す「離脱者ゼロ」プログラムであり、その内容は同級生との「ヨコ」関係、上・下級生との「タテ」関係、さらに教職員との「立場」関係を柔軟に組み合わせた「縁（えにし）コミュニティ」を作る。このコミュニティは、教室という実際の場を基礎としながらも、SNS を活用しバーチャル空間を利用することで、学生の適度な距離感のつながりがセーフティネットとなって孤立化を防ぎ、学生生活へのスムーズないざないを可能にし、そのことが「離脱者」防止に結果することが期待された。

「支援上回生」の役割

佛教大学の「縁」コミュニティは、大学ミッションや正課授業と連動させることで所期の目的である離脱者の減少を一定達成することができたと評価している。大学が目指した学生支援は、学生中心のコミュニティ形成を促進し、そこでのコミュニケーション力が学生間の人間関係をゆたかな内容をつくり、学生が自らの力で社会との「つながり」を深めていくことを期待している。

コミュニケーションのツールとして大学独自の「縁」SNS を開発したところが本プロジェクトの特色であった。しかし、実際には SNS の利用頻度はあがらず、所期の目的達成が危惧された。利用頻度をあげるために、学生目線の情報提供や短い文章による「声かけ」を重視し、その役割を 2、3 回生に求めた。この上回生を組織化し「支援上回生」として定着化を図ったが、全学的な広がりには達成できず社会学部の 2 学科（現代社会学科、公共政策学科）が活動を展開、その後 SNS は廃止されたが、社会学部の支援上回生は学部との連携を維持しながら新入生のサポートに積極的に取り組んでいる。

フォーラムでの報告は、支援上回生として活動する、現 2 回生の学生さんに協力を依頼した。新入生として支援を受けた体験、逆に新入生を支援する立場を経験した内容を報告してもらう。

「支援上回生」が支える導入教育 (入門ゼミの活用)

第18回FDフォーラム 第13分科会
 佛教大学 高橋伸一 野中萌美
 2013年2月24日

大学改革プログラム

- 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム採択事業（2007～10年）
 「縁コミュニティによる離脱者ゼロ計画」

目的

学生・教員・職員が縁コミュニティというコミュニケーションの場（入門ゼミ）を通して関わりあい、学生が「つながっていない不安」から「つながっている安心」を自覚し、相互支援することにより孤立化を防止する。

方法

コミュニティの形成（学生同士・上回生の支援・教職員）
 ツールとして佛大SNSの活用 + Face to Face（入門ゼミ）

動かない、使えない

- 独自SNSの機能的限界
- 職員も上回生も入門ゼミに入れない
- 「コミュニティ」への素朴な疑問・反発
 （学部による温度差）

twitter



改善と対策

SNSのモバイル対応 学生の生活スタイル
 学部ごとのプログラムへの支援
 のほりの制作（縁コミュニティのアップील）
 「支援上回生の会」立ち上げ



縁を動かすのは、学生のパワー

縁ルームの設置

気軽に相談できる場を確保
 支援上回生がいつも滞在している

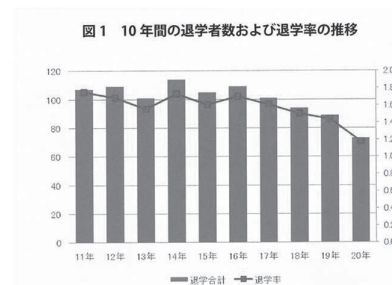
入門ゼミを全学共通化(縁)

学部によって多少こととなるが、基本は大学生活への誘い、勉強の仕方、図書館利用

支援上回生による1回生との結びつき

新入生と教職員のつながりの潤滑油として
 力を発揮、SNSの改良や普及の提言

• 退学率の推移（全学）



学部によって退学率は大きく異なる

- 社会福祉学部（0.3％）、教育学部（0.4％）
保健医療学部（0.4％）の退学率は低い
理由：進路選択の明確さ、個別支援の重視

表1 2008年度各学部別退学率

年度/学部	文	教育	社会	社会福祉	保健医療	学部全体
2008(平成20)年度	2.1%	0.4%	1.1%	0.3%	0.4%	1.2%

今後の学修支援の課題

「離脱者」⇒「低単位」の発見

- 1 セメスターは、50～70名
- 2 セメスターでは、100名
- 3 セメスターでは、150名

セメスターを重ねると（専門教育）、
学修へのモチベーションが低下する？
専門科目履修とキャリア形成の関わり

ご清聴ありがとうございました。



**支援上回生が支える導入教育
(入門ゼミ)**

佛教大学社会学部公共政策学科 2回生
社会学部 **縁** 支援上回生
野中 萌美

社会学部 **入門ゼミ**

- 社会学部一回生全員が名簿で振り分けられたゼミ
- 大学の授業の**導入教育**
(レジュメ作成・レポートの書き方・ノートの取り方のコツ等)
- **支援上回生**を受け入れる

私が受けた入門ゼミ

- 2回生の支援上回生が主に授業を進める
(ディベートやディスカッションが主)
- 支援上回生
 - 縁の上回生
 - 気軽に相談できる存在
- 美山研修
 - 先生よりも上回生が美山に詳しい場合も

支援上回生がいることで...

- 授業外のことも相談できる
- 2回生が授業を進める⇒モチベーション・積極性UP
- 美山研修でゼミが仲良くなる
- ディベート・ディスカッションが盛り上がる

縁SNS

- テスト前など、一部の人はここから情報収集
- 授業に活用する先生も

しかし

使用している人は少ない

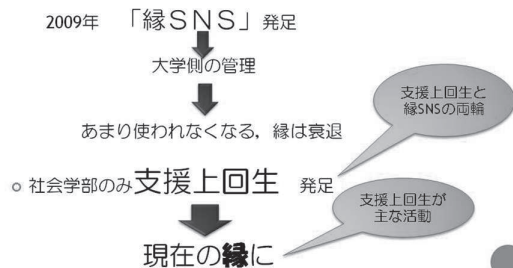
- 「つぶやき」の機能がない
- 大した情報がない
- 既に他のSNSがあるので使いにくい

縁

- 佛教大学におけるFDプログラム
- 学生間、学生と教員間の繋がりによるコミュニケーションの場
- SNSの活用

縁SNS 発足

縁SNS



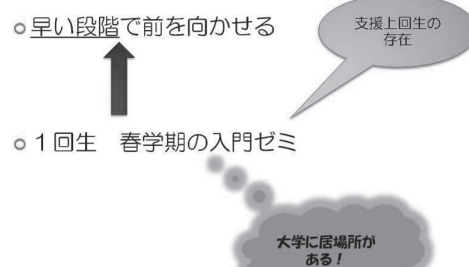
支援上回生

- 社会学部・2回生以上の有志学生
- 完全ボランティア
- 入門ゼミに毎回1人～4人で行く
- 美山研修に同行
- 新入生歓迎パーティー・ポーリング大会の企画

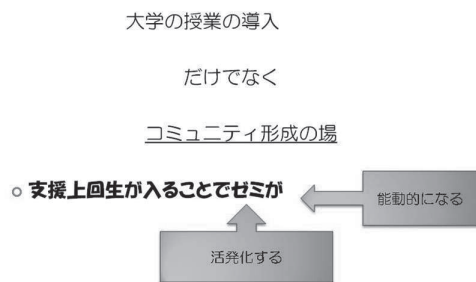
低単位学生

- 1セメスターの取得単位が10単位以下。出席日数も少ない。
- 低単位学生（社会福祉学科、教育学科は0。大部分は文学部、仏教学部）
- 不本意入学者に多い
- 公共政策学科の不本意入学者 3～4割

低単位学生と入門ゼミ



入門ゼミ



縁に入って・・・

- 2回生17名・3回生12名で活動
 - SNSは廃止
 - 4月と6月に新歓行事
 - 4月から支援上回生として公共政策学科のゼミに入る
- <私が縁に入った理由>
- ひとつ上の支援上回生に刺激を受けて
 - なんだかよくわからないけど「面白そう！」

支援上回生の立場として

<春学期>

- 2回生として授業内容のコメント
- グループワーク時にグループに入り、雰囲気づくり

<秋学期>

- レジューメ作成の手伝い（コピーの仕方など）
- グループディスカッションがスムーズにいくように雰囲気づくり

他のゼミでの活動

<春学期>

- 授業の流れを考える
- 一回生とコミュニケーションをとる、相談にのる（テストやレポートについて）

<秋学期>

- 先生の補助
- 春学期と同じ

<課題>

- どこまで支援したらよいか悩む
- 仲良くなりすぎてメリハリがつかなくなっているゼミも・・・

支援上回生をやってみての感想

- 緊張・何をしたらいいかわからない
- 授業終わりのコメントするだけ・・・
- 一年間を通してなんとなく役割りを見つけ出す

自分から話かけにいく

ディスカッション時のファシリテーター??

支援上回生の課題

- 支援上回生⇒実際何をしたらいいかわからない
- 先生⇒支援上回生をどう使えば良いかわからない

自分で役割を見つけ出さないといけない

そのために

- なぜ支援上回生がいるのかを支援上回生が理解する
- 先生方にもしっかり伝える

支援上回生になり成長したこと

- 大学の授業の目的を模索するようになり（「何のための時間か」）授業に対して意見をもつようになった（もっとこうしてほしい）
- 格段にコミュニケーション能力はついた
- いろんな先生と親しくなれるので、自分の学習に役立てられるようになった

縁による「学生の主体的な学び」

- 支援上回生の存在そのものが主体性の「大学にはこういうスタイルもある」「このような存在に自分もなりたい」
- 一回生は・・・「これが主体性」と肌で感じる刺激を受ける
- 支援上回生が授業を進めると一回生は「一緒に盛り上げよう（盛り上げてあげよう）」と前向きになる。



授業「内」と授業「外」の中間の視点から ～お茶の水女子大学附属図書館内ラーニング・コモンズを例として～

お茶の水女子大学 情報基盤センター アカデミック・アシスタント

池田 佳奈子

学生の縦のつながりを生かした学生支援
授業「内」と授業「外」の中間の視点から
～お茶の水女子大学附属図書館内ラーニング・コモンズを例として～

お茶の水女子大学 情報基盤センター
アカデミック・アシスタント 池田佳奈子

お茶大のラーニング・コモンズについて

2007年4月に図書館内に設置された
学生のための新しい学習空間



2階
総床面積4,542m²

1階

情報機器

教育用端末 MAC Mac OSX 30台 Mac/Win 両用 10台	教育用端末 Windows Windows 7 30台	複合機、スキャナ 印刷用端末
--	--------------------------------	-------------------

※ラーニング・コモンズを以下LCと記します
お茶大附属図書館 <http://www.lib.ocha.ac.jp/>

お茶大のラーニング・コモンズについて

- ・ LCの情報機器
- ・ 教育用端末
Mac OSX v.10.6 (30台) Windows 7 (30台)
Mac/Windows 両用端末 (10台)
- ・ 印刷とコピーが可能な複合機 (2台)
- ・ スキャナ (1台)
- ・ 電源・情報コンセント付の席 (8席)
- ・ 無線LAN (図書館内はどこでも接続可能)
- ・ OS・ソフトウェア等のマニュアル本、論文の書き方に関する本



お茶大のラーニング・コモンズについて

支援体制：ラーニング・アドバイザー (以下LA)
2012年12月現在LAは文系理系問わず
M2からD3まで17名在籍

よくある質問

- ・ コンピュータの基本的な使い方
- ・ 印刷方法など複合機の使い方
- ・ ソフトウェアの使い方 (Office、ブラウザに関すること)
- ・ 大学のメールへのログイン方法、送受信方法、携帯電話への転送設定方法
- ・ ヘッドホンの音量設定など、周辺機器について
- ・ USBメモリの使い方 (差込口・ファイルの開き方、取り外し)
- ・ ノートパソコンを学内のネットワークに接続する方法



ラーニング・アドバイザー (左)
と質問者 (右)

その他の支援：ロッカーパソコン

- ・ 図書館内に設置のロッカーからノートパソコンを借りられる (当日、図書館内のみでの利用)
- ・ PCを再起動すると、保存されたファイルや変更された設定がすべて削除される



学生証をかざす



パソコンを借り受ける

その他の支援：中期貸パソコン

- ・ 学部2年生以上・大学院生対象 (パソコンを管理するための基礎的な知識を既に会得していることを想定)
- ・ 半年単位の貸出し (延長可)
- ・ OSやウィルス対策ソフトのアップデートなどを含めた管理は学生自身が行う



ロッカーパソコン・中期貸パソコンについて：
笹倉理子、浅本紀子、「学生生活の支援としてのPC貸出サービス」、
2012 PC Conference

[illegible]

- 「マイパソコン」のすすめ
 - 学生本人が管理者としてパソコンを持ち、自分で設定などを行い、活用する
- パソコン活用室
 - マイパソコン活用の支援
 - 教職員、および学内インターンシップ制度による学生相談員による、きめ細かい指導
 - 学部1年生からの基礎的な質問に、丁寧に対応
 - <http://www.cf.ocha.ac.jp/panda/>

教育改革の方向性
学生主体の新しい学士課程の創成



- 文系出身のLAエピソード
 - 元々PCに詳しくない
 - LAになってから色々覚えた
 - 慣れていない学生の気持ちがかかる
 - 丁寧な説明を心がける
 - 顔を覚えられて、声をかけられることが増える
- 

- 理系出身のLAエピソード
 - LCでは対応していない、A1サイズの大きな印刷物を出力したい学生からの質問
 - 偶然学科の後輩だったので、学科の大判プリンタの使い方を教えることを約束
 - 後日、勤務時間外に個人的に一緒に作業



- ・文系出身のLAからの感想（良かったこと）
 - 質問に答えて、感謝されること
 - よく質問に来る子が、LC以外の場所で会った時にも、毎回あいさつをしてくれること
 - 自分がいる時間にわざわざ質問しに来てくれた時役に立っていることを実感できた
 - 忘れ物を届けてくれた時
 - 質問されたことは、なるべく答えたいと思い、質問された件を調べることで、パソコンの知識が増えた

学生の縦のつながり

- 文系出身のLAからの感想（問題に思うこと）
 - 例えば、プリンタに関する質問は多くの学生からされるが、勤務時間中に複数人から聞かれたときに、基本的な使い方は、まとめて教られたら良いと思う



学生の縦のつながり



- 理系出身のLAからの感想
 - 幅広い世代や国籍の学生がLCを利用している姿を目にし、様々な交流や留学プログラムなどがあることを知る
 - 朝9時から夜9時まで開いているLCで真面目に勉強に取り組む学生の姿を見ると刺激を受ける
 - 授業のレポートだけでなく就職活動やサークル活動に関する作業をしていて、学生生活を充実して過ごしている様子がうかがえる

学生の縦のつながり



- 理系出身のLAからの感想
 - LAになるまでは自分の学部・学年の情報だけしか気にしていなかった
 - LCでは、就職活動が始まれば、Webテストの動作環境などに関する質問が多くなり、文化祭が近付けば、ポスターの作製や印刷に関する質問が増えるなど、自分に直接関係のない大学の行事や他の学科・学年の動向を身近に感じることができる

学生の縦のつながり



- 他のLAからの感想
 - 教えられるようになったことが嬉しい
 - 図書館のデータベースや電子ジャーナル（聞蔵やSciFinder, Endnote Webなど）のことを聞かれることも多いので、自分の専門にも役立つ
 - 自分が知らなかったことを質問されたときに、自分で調べたり、人に聞いたりしたことが、自分にとって有益となり、さらに同じ質問をされたときに、それを生かして説明できる

学生の縦のつながり

- 問題点等
- LAの人柄に依存するところが大きい
- しっかりシステム化されていない



授業内と授業外の間



- 授業内のこと
 - 授業の課題を行う
- 授業外のこと
 - メールチェックやウェブサイト閲覧
- 問題点
 - 授業の課題の質問にLAがどこまで受け付けるか
- 授業担当の先生のコメント
 - LAに質問することがPCに慣れる早道の一つになる

授業外での事例：ピア・アドバイザーによるアカデミックアドヴァイジング

国際基督教大学 教務部 アカデミックプランニング・センター

森川 園子

大学コンソーシアム京都
第18回FDフォーラム分科会

学生の縦のつながりを活かした学生支援 授業外での事例：ピア・アドバイザーによる アカデミックアドヴァイジング

2013年2月24日

国際基督教大学 教務部 アカデミックプランニング・センター
森川 園子、水庭 隆史（教養学部3年）、西村康平（卒業生）

ICU 60th Year

ICU概況：QUICK OVERVIEW OF ICU

- ・ 教養学部 アーツ・サイエンス学科
- ・ 一期生入学 1953年
- ・ 学部1学年 定員620名
（大学院生、交換留学生含め約3000名弱）
- ・ 学生/教員：19：1
- ・ 外国人教員：約34%
- ・ 3学期制
- ・ 4月入学・9月入学
- ・ バイリンガル教育
（日本語または英語の語学要件）
- ・ 卒業研究が必修

2012年5月現在

ICU 60th Year

ICUにおけるピア・サポートの取り組み

アドバイザー・
リーダーズ
担当：就職相談グループ

ピア・アドバイザー
担当：アカデミック
プランニング・センター

特別学習支援サポーター
担当：特別学習支援室

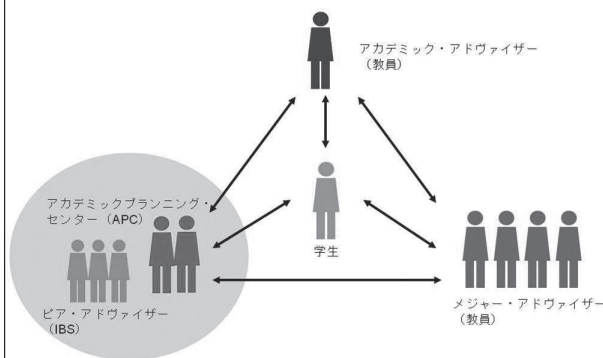
ライティング・
サポート・デスク
担当：図書館

トップダウンというよりボトムアップ

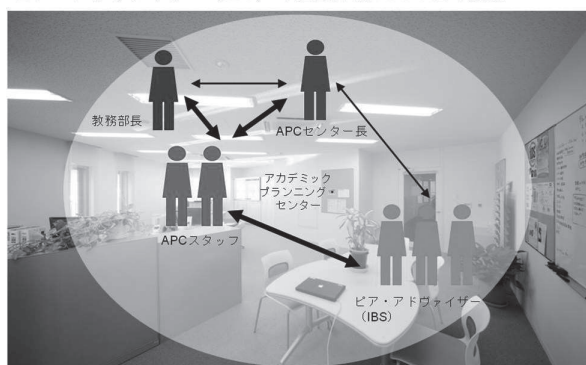
- ・ ピア・サポート全体を統括、掌握する部署はない
- ・ 自然発生的に、各部署が必要、有用性を認識して始めた

コミュニティー・
アシスタント
担当：ハウジング・
オフィス

ピア・アドバイザーの大学における位置づけ （アカデミック・アドヴァイジングの体制）



ピア・アドバイザー（IBS）の運営体制：APCとの関係



IBSとAPCの主たる活動：アカデミックアドヴァイジング

学生からのアカデミックプランニング
（履修計画、メジャー選択など）の相談に応じる。

IBS: チームに別れての活動なども行う
APC: 高度複雑なケースをフォローする、部署間調整等を行う

APCとIBSの共通目標
アドヴァイジングでの対話を通じて、
主体的に自らの学びや将来について長期的に考え、
選択できる学生を育成する。

聴く。聞き、引き出す。選択肢を提供する。

ICU 60th Year

アカデミックアドヴァイジングとは何か

車輪のハブ (King, 2008)

- ◆キャンパスの他のほとんどのセクションと繋がっている
- ◆緊密な連携が鍵

教育プロセスの一環 (Hemwall, 2008)

- ◆大学の使命、教育目標と密接な関係にある
- 「どのような学生を育てるか」
- ◆学びのコンテキストで考えるもの
- 「学生はアドヴァイジングを通じて何を学ぶのか」
- 「アドヴァイジングで学びはどのように起こるのか」

↓
授業における学びと同じ

Informational, Conceptual, Relational Dimensions

- ◆意図的にデザインするもの



Gordon, V., Habley, W., and Grites, T. (Eds.) (2008). Academic Advising: A Comprehensive Handbook (2nd edition), chapters 15 & 16, San Francisco, CA: Jossey-Bass.

ICU 60th Year

ピア・アドヴァイザー：ICU Brothers & Sisters (IBS) とは？

- ◆誕生の背景：教学改革によるアドヴァイジング強化、アカデミックプランニングの促進（自発的学修者育成）

- ◆2009年3月始動、2～4年生19名、3年間の継続

- ◆選考、理念・ガイドライン設置

- ◆トレーニングの実施

- ◆月例ミーティングの実施



ICU 60th Year

ピア・アドヴァイザーIBSの活動

1) 履修相談

- ー 学修や学生生活について相談対応
- ー 平日決まった時間に2～3名がAPCに在室
- ー 学年の異なるIBSがシフトを組む

自分が一番
やりたいことは？
優先順位をつけてみ
よう！



留学も、教職も、
バイトも、インター
ンも、サークルも...
やりたいことがいっ
ぱいです！

ICU 60th Year

ピア・アドヴァイザーIBSの活動

2) チーム活動

- ◆チーム制：リーダー、広報、ウェブ、研修、機動隊
- ◆イベント：バカ山履修相談会、リベラルアーツ・プロジェクト
- ◆その他：APCと（学外向けワークショップ、1年生向けハンドブック作成）同窓会と（卒業生へのインタビュー）学内教職員と（調査、大学広報）等



ICU 60th Year

縦のつながりを活かした学生支援（APCの視点）

- 1) 2年生から4年生までのIBSがいる
幅広い相談に応じることが可能、上下の繋がり
- 2) 卒業までの継続を前提とした活動
3年間での成長、大学の活動としての自覚の強まり
- 3) APCとIBSの密な繋がり、連携
APCとしての方針、枠組みの中で、IBSの主体性を重視、尊重
- 4) 全学的な認知
学長、学部長、他部署、教職員の承認、協力を得る
- 5) 組織横断・縦断的な活動
前例にとらわれない柔軟性

ICU 60th Year

縦、横、ななめ



色々な方角につながりがあるから、より強固になる

スタッフ～現役IBS



ICU 60th Year



縦のつながりを活かした学生支援（IBSの視点）

- 1) IBSと他の学生
- 2) IBSと教職員、卒業生（同窓会）
- 3) IBS同士（IBS卒業生も含め）



- 1) IBSと他の学生と
アドヴァイジングの中での上級生/下級生とのつながり

→ピア・アドヴァイザーとして意識していること
「学生目線」とは：

縦ではなく、フラット
自分や先輩/後輩の知識/経験の共有
近づきやすさ・話しやすさ



- 2) IBSと教職員、卒業生（同窓会）と
それぞれの架け橋になる

具体例：IBSの研修、リベラルアーツ・プロジェクト、
同窓会インタビュー、APCとの日常的なやりとり

- ・大学についてより理解を深め、学んだことを他の学生に還元する
 - ・普通の学生にはない出会い→つながりと刺激
- 教員、学生、職員、卒業生をつなぐ



- 3) IBS同士（IBS卒業生も含め）のつながり
先輩から後輩へ伝え、伝わるもの

→IBSという組織の脆さ
3年間という限られた活動（メンバーが毎年入れ替わる）
APCスタッフの異動の可能性
先輩を観察して育つ後輩→大器晩成型の活動
だからこそ... 継続させなければならない。
創設メンバー(2012年卒)の存在と意思を伝えたい。



現役～先輩



ICU 60th Year

縦のつながりを活かした学生支援（IBS卒業生の視点）

- ◆立ち上げから定着までの課題は？どう乗り越えた？
 - ・理念は？どう活動する？→ひたすら考え、話した
- ◆社会人になって経験が生かされていると思うこと
 - ・対話の中から情報を集め、整理する習慣
 - ・自発的な課題解決への挑戦



面白さ：
課題 ≠ 困難



先輩～スタッフ



ICU 60th Year

つながりを強めるしかけ作り



大学の文化の継承



ありがとうございました

ICU 60th Year

1. はじめに

本発表では、近年急速に学生支援の現場で拡大している「学生による学生支援」の取組について、JASSO（日本学生支援機構）による全国高等教育機関に対する調査結果や、先駆的な取組を行っている大学への訪問調査をもとに、取組の現状と実態について論点を整理していった。なお、本発表は取組の実践例を紹介することを目的とするのではなく、「学生による学生支援活動」に関する基礎的知見を提供するとともに、後半のフロアを含めたディスカッションや相互の対話を活性化させるための全体の共通認識を深めることを目的として行った。

2. 学生による学生支援活動の発祥 ―北米の高等教育における展開―

「学生による学生支援」は、ピア・サポートやピア・チューター、ピア・カウンセラー等、様々な呼び名が用いられてきた。いずれにしても、どの用語でも「ピア (peer)」である学生が他の学生の相談に応じ、支援を行う制度を指しているが、その支援領域も拡大しており、それに伴って近年、著しく支援対象、方法等の多様化も進んでいる。ピア・サポートは当初、米国の中等教育において非行防止プログラムとして始まったものを、カナダの中等教育において、スクールカウンセラーが全国区の取組として広げていったとされる。

その後、米国の高等教育においても文化の中に自然に培われていた先輩―後輩（時には同輩同士も含む）の関係性を用いた支援の制度化が進み、現在では支援を行う側の学生のリーダーシップトレーニング機会としても重要なプログラムとして根付いている。北米の高等教育機関では、これらの「学生による学生支援」は「ピア・エデュケーション (peer education)」と総称されており、学生スタッフ（ピア・エデュケーター）の訓練方法やプログラムの認定制度、関わる教職員のための学習機会等、過去 20 年間に於いて量的、質的にも開発が進められてきた。

その背景には、学生の多様化の結果、支援の必要性が高まったことに加え、教室外の学生支援上の「教育的な学生への関与」という新たな理念の登場が関係していたことは間違いない。この理念転換は 1980 年代後半以降、米国の高等教育が追い求めている教育から学習へのパラダイム転換を受けて始まったものであり、学長や州政府、また支援に携わる専門職の職能向上という内外からの大きな圧力が影響している。

米国の経験に拠れば、学習者中心の大学教育において、学生支援活動の最大の目的は「学習環境の構築」となる。その核となる概念は、「学習コミュニティの形成」であり、学びの主体者である学生自身に対して、いかに自律的かつ主体的な学びを促進していくためのプログラムやサービスを展開するかに収斂されていく。このような高等教育全体の大きなうねりの中で、「ピア・エデュケーション」は発展してきたのである。

3. 日本の高等教育における現状と課題

3-1. 全国的な動向

翻って我が国の高等教育においては、答申や政策動向においては、学生の主体的な学びを中心とした学士課程教育の構築、また国際水準における教育の質保証の議論等、過去 20

年間の米国における議論と共通する展開を見せている。

このような中で、主に学生の多様化を背景にした「学生の対するきめ細やかな支援の充実」を目的として、「学生による学生支援」は広がってくる。2010年9月にJASSOが行った調査によれば、33.6%の4年制大学（短大52.8%、高専49.1%）が「ピア・サポート」に取り組んでいると回答しており、「今後実施したい」と回答した30.4%（短大32.1%、高専13.2%）を含めれば、半数以上の大学がピア・サポートについて関心を高めている。また、同調査によれば、実施している4年制大学のうち、2005年以降に取組を開始したケースが68.7%であり、特に近年において取組が広がってきたことを裏付けている。

さらに支援領域において、当初のカウンセリングの理論やスキルを基本にした悩み相談に限らず、学習相談や履修相談、キャリア支援、留学生支援等、学習・生活両面における直接的な支援領域への展開とともに、学寮やオープンキャンパスといった支援の「場（場所・場面）」の広がりも見られる。

このような全国の状況を踏まえ、先駆的な取り組みを行う大学への訪問調査を、数回にわたり行った。その調査結果に拠れば、学生による学生支援は、①現代的な学生に対して、人間的な成長や大学への帰属意識を喚起させる可能性が大きい、②学生支援組織と教務系組織、教員と職員といった組織や立場を超えた連携が課題として浮き彫りになってきている、③担当する教職員の感じる制度の効果（効用）を、同僚である他の教職員や上司と共有しにくい、④次世代のリーダー育成（学生スタッフや担当教職員）の側面での課題が大きい、等の課題が見られた。

3-2. より良い取組へと発展させていくために

また、学生の人間的成長を促進する、主体的学習者の育成として、学生による学生支援を展開するのであれば、活動を通じた学生の成長の可視化や、大学全体への貢献についての議論を進めていく必要もある。その際には、近年、大学教育改革の一連の流れを支えている学士課程教育教育への注目や、学習者中心の大学教育のあり方等の視座を踏まえ、大学教育における学生支援の理念を捉え直していくことが重要である。

その上で、自大学の目指す教育目標や育成したい学習者像（学生の成長）に対し、ピア・エデュケーションの取組が、どのように教育目標の達成へと貢献できるのかを明確化していく。このようなビジョンや目標の共有は、トップダウン式よりも実施に関わる教職員や、ピア・エデュケーターである学生スタッフの相互に意見を出し合いながら開発していくことが望ましい。

また、プログラムを実行していく際に、実施担当者である教職員の課題の多くは、「学生への関わり方」である。もちろん取組を通じて支援を受ける側の学生への関わり方についても考えていかななくてはならないが、同時に学生スタッフの育成も大きな課題となってきた。学生スタッフに対しては、事前研修や取組中に行うオフィシャルな研修のあり方や手法、そして日常的なインフォーマルな場面におけるやり取りやアドバイスを通じた関わりといった「実際の活動を通じた学生スタッフの育成」の2つの側面がある。大学が目指す学習者像を体現する立場でもある学生スタッフに対してどのように関わり、彼らの成長を促していくかは、取組を発展させていくためのテーマの一つである。

最後に、本発表を通してフロアと議論したいくつかのトピックスの根底には、何よりもこれらの取組を通じていかに普段の業務や活動をふりかえり、省察力を高め、成長していくという、担当者である教職員自身の成長の重要性に対する認識の高まりが現れていたように感じた。今回の発表内容が、参加者に対して何らかの気づきに貢献できていたら幸いである。

<参考文献>

川島啓二ほか(2011)『学生支援の現代的展開－平成 22 年度学生支援取組状況調査より－』
大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム報告書，日本学生支援機構学生生活部。

中野武房ほか編著（2008）『ピア・サポート実践ガイドブック』ほんの森出版。

Kuh, George D. (1996). "Guiding Principles for Creating Seamless Learning Environments for Undergraduates." *Journal of College Student Development*, 37(2), 135.

